

# 平等主義暴力

ポスト狩猟採集民トウワとのマルチモーダル人類学

ふくだへろ

春風社



## 凡例

- ・調査地の地名、人名ともに仮名で記す。ただし承諾をえた人物に関しては通称で記す。
- ・ルワンダ語のラテン文字表記については正書法に従う [Republic of Rwanda 2014]。
- ・ルワンダ語の翻訳に際しては、Coupez et al. [2004]、Habumuremyi & Uwahahoro [2006] などの辞書的定義を参照しつつ、トゥワの語感・用法を優先する「現地使用主義」に基づいて訳語を確定した。
- ・ルワンダ語の固有名詞等については、「カタカナ+ラテン文字」で記す。ただしルワンダ語をカタカナ表記する際には実際の発音を優先させる。例えば、Bwimba は「ブウィンバ」ではなく「ブグウィンバ」、Basabya は「バセビヤ」ではなく「バセブジャ」と表記する。ただし「ルワンダ (Rwanda)」など外務省表記・主要メディア表記が普及しているものは例外的に従来の表記を用いる。
- ・日本語以外の音声言語の表記については、基本的に「日本語訳+日本語以外」で記す。日本語以外の音声言語の原語表記は斜体で記すが、アカデミック・タームとしての英語は正体で記す。
- ・外国語文献の引用の訳出は特に断りが無い限り、すべて筆者による。
- ・筆者による注記は「」で示す。

平等主義暴力——ポスト狩猟採集民トゥワとのマルチモーダル人類学

目次

序章

1 暴力とは何か

2 感情⇄身体の政治

3 マルチモーダルな知性

4 本書の目的

5 対象と方法

6 本書の構成

第1章

映像

1 『トゥワ歌 *Indriyo z'Abantu*』

2 対象ではなく、関係を編集する

3 リアリズムの檻から出る

4 ポリフォニック・エディティング

第2章

- 5 外部を導入する 71
- 6 映像がつなく世界 73

背景 85

- 1 ビルンガ火山群と周辺地域 86

- 2 大湖地方トゥワ 90

- 3 ビルンガ・トゥワ 93

- 4 トゥワの「社会」 96

- 5 無為、そして喧噪、また無為 107

第3章

闘争 113

- 1 闘争の定量的傾向 115

- 2 闘争に理由はない 119

- 3 拡散する闘争 124

- 4 闘争とダンシングの互換性 126

- 5 分節化されずに共鳴する 128

- 6 開かれた共在的な自己 131

第4章

音楽

149

- 7 向こうからやってくるものとしての「心」 133
- 8 ポリエモーション||ボデイ 135
- 9 平等主義暴力から考える「平和」 138
- 1 「音楽」は聴覚経験ではなく身体経験である 151
- 2 感情||身体を誘発するイギタラモ 152
- 3 内発的ダンシングと権力的ダンシング 155
- 4 楽曲の分類 158
- 5 越境するダンス 164
- 6 打楽器としての身体 167
- 7 音楽で会話する 170
- 8 グルーヴと遊ぶ 174
- 9 言語的矛盾を抱えこむ 176
- 10 固定を拒否し、流れていく言語 181
- 11 全体への統合ではなく、ひとりひとりの身体へ回帰する 187
- 12 踊るポリテイクス 197
- 13 差異が響きあいながら、共に在る宗教 202

第5章

罵倒

213

1 罵りのバリエーション 216

2 息をするように罵る 218

3 イメージが共振し、罵倒がグルーヴする 223

4 罵倒する音楽 229

5 音楽する罵倒 234

6 虚空に投げられ、響きあう罵倒 241

7 罵倒における言語と身体のレイヤー 244

第6章

撮影

247

1 方法論としてのシングルショット 249

2 『ドック・シット・フード』 252

3 「平等主義暴力」の二〇分 253

4 デーデ、キダ、ラザ、そしてカメラと私 255

5 ポリフォニック・モード 261

6 奇跡を待つという方法論 264

第7章

歴史

273

1 時代の先を行きすぎた民族誌

276

2 二〇世紀初頭におけるルワンダ北西部の社会情勢

278

3 かつてのトゥワの社会

280

4 他集団とトゥワ

283

5 トゥワと在地民の戦争

285

6 森林通行料

287

7 トゥワの王

289

8 むかしの集団内暴力

291

9 ムブティと暴力

292

10 三者関係を援用して自律する先住民

293

11 シューマツハの神学としての『キヴ・ピグミー』

298

12 疎外という名の自由

302

終章

305

1 平等主義暴力

307

2	平等主義暴力の「人間の条件」	
3	感情∥身体∥政治	310
4	共振する知性	312

あとがき	324
------	-----

参考文献	336
------	-----

索引	347
----	-----

監りのしる

やめあ

斬れよ、

斬れよ

どうせ何もきかぬせに。このワロンロが

殺しやる

離せ、

そり

へ

ろが怪我するかもしれない

石をぶちやぶった

地獄人

マホロの棺桶が血であふれてた？

来たか

すまひしたかったんだ。

あーってみるよ

強さの強さ

マホロはもう死んだ、いまも死にかけてるし、どこにも存在しなかった

えらはゴミナミ

よの

目撃者

ん

ペら、あつちを照らせ。あつちを照らせ

瓶を持つ人

瓶を持つ人

瓶を持つ人

はじめに

漆黒の闇をカメラライトで切り裂いて、私はセツアの指示した方を照らした<sup>1</sup>。

「ほんつとうるせえな、クソが」

確かに。カメラを回している私は声にださずに心の中でうなづく。確かにうるさい。「血であふれてる」わけではないが、村中が音であふれている――

いたるところから噴きだし、乱反射する二〇人あまりの声という声。女、男、子ども、老人。みなが叫んでいる。パパン。パンツパパン。パパンツパン。二、三、四、五。様々なリズムで声にはさまれ、声を衝き動かすハンドビート。手だけではない。手に持ったサンダルを叩く音。棍棒を地面にたたきつける音。鉈をたたきつける音。すべてが混沌と絡みあい、これは音楽なのか、騒音なのか、ただの音なのか――この場の音響をつくっている。そして、通奏する虫の音。ときおり鳥が鳴いて、アクセントが加わる。

カメラが区切る四角いフレームのなかで、トゥワの人は相手を指さし、腕をひろげ、腰に手をあて、胸を張る。鳥が羽ばたくように腕を振りまわし、あるいは雪のうえを滑るように重心を移動させ、相手との位置取りをかえ、旋回する。一気に相手との距離をつめる。それぞれの身体が呼応し、ズレ、かわし、跳躍する。「坩堝」という言葉を思い出しながら、彼らの身体の躍動を確実にカメラで捉えようとする私の身体はゆっく

りとしか動けない。ラベンダーにも似たユーカリの木の匂いと、夕食の焚火の残り香が鼻孔をつく。

ジェリ（二〇歳、女性）がバラ（二五歳、男性）の肩をサンダルで叩いた。顔をしかめたバラが振り向くより前はやく、横にいたハーエ（一八歳、女性）がザイレ（四二歳、女性）に襲いかかる。顔面を突きとばした。よろめいたザイレは右脚で踏んばり、崩れをこらえる。そのまま大きく右腕を引き、繰り出した拳がハーエの左耳に当たった。同時にジェリが振り下ろしたサンダルがハーエの頭に当たる。一瞬ハーエはよろめく。しかし持ちなおし、すぐさまジェリを突きとばす。それに合わせて杖を振りかぶったバラが、ジェリめがけて振り下ろそうとする。しかし、この距離で一二〇センチの杖は長すぎる。ジェリに腕を振りはらわれたバラは、ジェリと揉みあいになる。そこにランゲ（二三歳、女性）が加わった。バラを突きとばす。すかさず距離をためて、バラの顔に右フックを打ちこむ。杖で打とうと距離をとるために後ずさりするバラ。そうはさせまいと、左腕を高くかかげながら接近するランゲ。バラの後ろには壁がある。もうこれ以上は退がれない。振り下ろそうとする杖先が揺れている。その一瞬の隙に、ジェリが踏みこんだ。杖をもったバラの腕を両手で抱え、杖の取りあいになる。

これは一体なんなんだろう——そんな疑問もわかないまま、この場のリズムを捉えようと私はカメラを回している。

いつの間にか棍棒を手にしたハーエがランゲと言いいいをしてる。さらに二メートルほど向こうでは子どもたちやセツア（二七歳、女性）たちが遠まきに眺めながら、会話をしている。セツアはついさつきまで激し

1 この夜の記述は私が二〇二〇年一月二七日に撮影した映像をもとにしている。

く罵倒していた。話の内容は聞こえない。その横ではデーデ（六〇歳、女性）とラザ（二〇歳、男性）、ラブ（二四歳、女性）、ゴメ（二五歳、男性）が踊っている。MP3対応のラジカセを肩に抱え、ゴメがステップを踏む。ラザとラブが向かいあって鶴のようにステップを踏みながら、腕を振りまわし、相手を意識しながら互いの位置をずらしていく。デーデは二人の方に尻を突きだし、セクシーに上下させて踊っている。周囲の喧嘩がうるさすぎて音楽は聞こえないが、恐らくはタンザニアやウガンダのポップスだろう。

いつの間にかラブとチュビジ（一六歳、男性）の喧嘩が始まっている。ラブが走り寄ってフック気味に拳をいれた。チュビジも懐中電灯を持った右手で殴りかえす。曇みかけるラブから距離をとって、チュビジが腕を振りまわしている。追撃をゆるめたラブは、チュビジをじっと見つめていた。

村中が騒然としている。現在夜の一〇時一四分。でも、それはいつものことだ。これから二時間はさらに続くだろう。今日、怪我人は出るだろうか。闘い、罵り、踊り、しゃべり、眺める。食事をして、一息いれる。そして、また外に出て闘う。様々な感情と身体の実践が折り重なり、並列しながらトゥワの夜は更けていく。おしゃべりや傍観が音楽や闘争の契機となり、またその逆にもなる。この後も更なる闘争や音楽が勃発し、収束し、勃発するだろう。そして疲れた人から順に家にもどり、眠りにつく。朝には何事もなかったかのようにまた新しい一日が始まる。

いったい、こうしたトゥワの人々の生をどう考えたらいいのだろうか——カメラを回している最中には生じなかった疑問と、私はこの五年間向きあってきた。

二〇二〇年に妻の裕美、娘の葉と一緒に一年ほど長期調査をし、その後は二〇二二年と二〇二五年に単独で追加調査をした。その過程で暴力を中心に考えるべきだという結論に至ったが、そもそも私は暴力に興味など持っていないかった。ニャルサンゲ村のトゥワの人々を調査しようと決めたのも、いくつかの偶然からだった。

マンチェスター大学の映像人類学修士課程でルワンダ移民の研究をした後、立命館大学の博士課程ではルワンダ本国に行って研究するのが、連続性の観点から望ましいと考えた。そしてルワンダの中ではポスト狩猟採集民でありピグミー系集団の一つであるトゥワの人々に興味を惹かれた。

そもそも私が人類学を志した理由の一つは、哲学、政治学、経済学など多くの学術領域が、西欧、日本、近代、知識階級など限定された視点に閉ざされながら、「人間性」や「世界」のような普遍を語ることへの違和感があったからだ。だから現代社会からは相当な距離がありつつ、人類史の九九%を占める狩猟採集という生産様式に近年まで従事していたトゥワの人々は、人間性についてより深く探究するという観点から、研究のしがいがあると考えた。

ピグミー系集団はアニミズムの精霊信仰とポリフォニー、ポリリズムを特徴とする音楽で知られており、平等で平和な社会を営むとされている。トゥワの先行研究はあまり多くないが、そうした集団と同じような人々であるとされていた。アニミズムへの個人的な関心もあり、当初は、彼らのコスモロジーと音楽について研究するつもりだった。二〇一九年の予備調査の段階で、ルワンダ北部と西部のトゥワ・コミュニティを二〇ほど回り、調査助手のベン・シガボと相談の上、その中で最も狩猟採集民らしい雰囲気を残していると思われるニャルサンゲ村を調査対象に決めた。

しかし、実際住んでみると精霊信仰のようなコスモロジーはかけらも感じられなかった。宗教について質問をして返ってくる答えは一神教、キリスト教徒としか思えないものだった。そして、人々は毎日闘い、歌って、鳴らして、踊っていた。罵りあうだけでなく、殴りあい、噛みつきあい、石を投げあい、棍棒や鉈を振りまわっていた。人死が出ることはきわめて稀だが、「殺す」「殺してみろ」という激しい怒号が飛びかい、人口八〇人程度のコミュニティで流血を伴うような傷害が、およそ九日に一度発生する。

一九八二年に日本で生まれ育った私は、暴力はよくないものだと思われてきた。暴力は際限なく連鎖して社会を分断し、不当な抑圧や支配を生むと理解してきた。私自身、中学校にあがってから殴りあいをしたことは数えるほどしかない。できることなら根絶すべき「悪」として暴力を捉えてきた。

しかしトウワの人たちはそうした「常識」を軽々と超える。彼らの社会生活は暴力に満ちているが、それによつてコミュニティが敵対的な派閥に分断されることはない。復讐の連鎖によつて暴力が際限なく拡大することもなければ、強者が弱者を支配することもない。激しく噛みつきあつた当事者同士が、翌日は何もなかったように一緒に畑に行き、飯を食い、談笑する。そこには、暴力的でありながら平等で、平和な社会があつた。

反対に日本社会では、公的には暴力が否定されつつ、実際には様々な形で容認されている。ネタニヤフ政権のパレスチナ虐殺に私たちは間接的に加担している。生産性のない人間は殺すべきとした相模原障害者殺傷事件にも一定の賛同が見られた。学校におけるいじめや自殺の増加、抑圧的で非人間的な職場環境の横行。生の基本的な単位である家庭も例外ではない。家庭内暴力(DV)は増加傾向にあり、身近でも被害を受けたという声を耳にする。こうした暴力に共通するのは他者を支配したいという欲望とその正当化だ。果たして私たちは暴力と真剣に向きあつてきたと言えるのだろうか。

生きとし生けるものが他者に力を行使できる以上、暴力なき生は原理的にあり得ない。それでも社会に容認・黙認される暴力と指弾される暴力の差異、つまり「誰になら暴力を振るつてもよいか」という選別が存在する。この選別を支える境界線は不均衡を生むだけでなく、しばしば暴力の加害者が被害者を「動物」になぞらえるように、「誰を人間と見なすのか／見なさないのか」という根源的な差異を産出する。つまり、暴力が人間を形づくり、社会が描く人間像が暴力のあり方を決定する。

だとすれば、トウワの人たちの暴力はどのような人間観を提示するのだろうか。妻と娘と共に彼らの生活に

身を置き、撮影し、ときには闘争に加わりながらも、私がそこで感じたのは緊張と高揚であつて、恐怖ではなかった。日本で見聞してきた暴力とは明らかに異質だった。彼らの暴力には、他人を支配しようとする意志がほとんど見られない。彼らにとつて暴力とは、怒りや悲しみといった感情と身体の生成的な交感であり、統制や支配の手段ではない。むしろ暴力を許容することこそが、平等で平和な社会性を生みだす基盤となつてゐるのではないか。

本書ではそのようなトゥワの人たちの暴力を「平等主義暴力」と名づけ、闘争、音楽、罵倒といった社会実践を通じて考察する。こうした分析を通して、現代社会に遍在する「支配のための暴力」を相対化し、暴力そのもの——すなわち人間そのもの——について再考を促したい。

読者の中には、自分とトゥワの人たちを隔たつた存在として感じる人もいるかもしれない。たしかに狩猟採集民は究極の「他者」である。一方で同じ人間として、彼らは究極の「私たち」である。彼らの暴力⇨人間像は、人類の可能性そのものを示唆し、私たちに自省を要請する。

リベラリズムと、それを政治・経済制度として展開してきたグローバリズムは、人権や市場といった普遍的な価値を掲げながら、同時に排除や格差を生産してきた。その限界が露呈するなか、各地では権威主義的な統治や強権的なポピュリズムが「安定」や「過去の栄光の復権」を名目に正当化され、暴力があらためて公然と擁護されるようになってゐる。近代は暴力を例外的な状況として周縁化することで推進してきたが、そのように考へて済ませられる時代は終わった。暴力は社会の外にあるのではなく、むしろ社会そのものの形を映す鏡だ。こうした状況のもと、「暴力」とは、私たちがこれからのどのような関係を築き、どのような社会をつくりたいのかという問いそのものになつてゐる。本書が、そのような問いに向きあうためのヒントになれば幸いである。

ふくだべろ

マルチモーダル人類学者、詩人、アーティスト。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特別研究員（学振 P D）。立命館大学先端総合学術研究科博士課程修了。博士（学術）。Forward Prize for Poetry 選奨（2020）、マンチェスター国際映画祭実映映画賞受賞（2016）。

【主要業績】

論文

「「わたしたちは毎日殺し合っている」——トゥワ・ピグミーの平等主義的暴力とポリエ

モーション＝ボディ」（2025）『文化人類学』89（4）：495-515

映像

『ドッグ・シット・フード』（2025）

詩集

『Flowers like blue glass』（2018）Commonword

展示

《SOS 応答と対話で「何か」を探す》（2025）武蔵大学、西野正将・小森真樹との共作

\* 本書の写真はすべて筆者撮影による

# 平等主義暴力

—— ポスト狩猟採集民トウワとのマルチモーダル人類学

二〇二六年三月二日

初版発行

著者 ふくだぺろ

発行者 三浦衛

発行所

春風社 *Shumpusha Publishing Co., Ltd.*

横浜市西区紅葉ヶ丘五三三 横浜市教育会館三階

《電話》〇四五・二六一・三六八 《FAX》〇四五・二六一・三二六九

《振替》〇〇三〇〇・一・三七五二四

<http://www.shumpu.com>    ✉ [info@shumpu.com](mailto:info@shumpu.com)

装丁・組版設計

松本久木

印刷・製本

モリモト印刷 監製

乱丁・落丁本は送料小社負担でお取り替えいたします。

本書の無断転載・複製を禁じます。

© Fukudapero 2026. All Rights Reserved. Printed in Japan.

ISBN 978-4-86816-074-8 C0039 Y4600E